

なばりのたからもの第十号

「そんなこんなでわあわあゆうてるあいだに改元ということになりました」

「五月一日に新しい元号がスタートしました」

「えらい騒ぎになりましたけど」

「日本全体が明るい祝賀ムードに包まれましたね」

「日本人はこんなんで大丈夫かと心配になるほど白痴的な浮かれようで」

「でもおめでたいことですから」

「そうこうするうちに五月十二日」

「何がありました」

「名張ユネスコ協会の新年度総会が開かれました」

「君ユネスコと何か関係があるんですか」

「じゃーん」

「なんですねん」

「皆の者頭が高い控えおろう」

「君は助さん格さんですか」

「なばりのたからもの第十号です」

「なんですねんそれ」

「その総会の席上で僕が名張ユネスコ協会からなばりのたからもの功労者に認定していただいたんです」

「君のどこがたからものすねん」

「僕にもさっぱりわかりません」

「名張の嫌われ者とか名張の困り者とかやったらわかりますけど」

「三月に名張ユネスコ協会のかたから電話で連絡がありました」

「どんな連絡でした」

「あなたはなばりのたからもの功労者の候補者に選ばれましたからこれまで業績をまとめて提出してください」

「君に業績とかあるんですか」

「死ぬほどありますからごく大きっぱなところを書き出したのをさらに要約したのが下段の④でございます」

「よう恥ずかしげもなくこれだけ並べられたもんですな」

④

■郷土史家として――

2004年から伊賀まちかど博物館「はなびし庵」(中町)で上演される歴史影絵劇の台本を担当し、「乱歩誕生」「名張忍法帖」など八作を提供。新作「赤目滝能楽案内」は2019年春に公開の予定。

2005年から三年間、県立名張高等学校で非常勤講師として、「マスコミ論」を指導、校外学習で生徒とともに旧町地区を調査し、その成果をA4判のリーフレット「名張まちなかなび」にまとめて地域の魅力を発信した。

2008年、名張ロータリークラブの依頼を受け、名張市内の中学生に江戸川乱歩を紹介するA3判のリーフレット「少年少女乱歩手帳」を制作、名張と乱歩の関係を説明した。

■漫才作者として――

1997年から地域雑誌「四季どんぶらこ」(暮しの工房川上発行)、「伊賀百筆」(伊賀百筆編集委員会発行)

「それで厳正な審査の結果認定していただけることになりました」

「そらよろしおましたな」

「頂戴した認定証には下段⑤のとおりお書きいただいてあります」

「乱歩と名張の魅力を発信ですか」

「それほんまなんでしようか」

「僕に聞かれても困りますけど」

「たぶん名張ユネスコ協会のみなさんは僕のことを根本的などころで誤解していらつしやるんですけど」

「名張市役所行って君のことリサーチしたら一発で却下やつたでしょうね」

「でもまあ頂戴できるものはなんでも気持ちよう頂戴しておくのが人の道ゆうもんですから」

「そんな人の道聞いたことないですけど」

「認定証をいただいたあとは記念講演を仰せつかりまして」

「またあほなこと喋りましたか」

「講演をお聞きいただいたかたにはおみやげもお受け取りいただきました」

「どんなおみやげで」

「この漫才の一八二頁から二一五頁まで抜刷を印刷製本して無料でお持ち帰りいただいたんです」

「なんでそんなことしますねん」

「僕がどんな人間か市民のみなさんに知っていただきたいと思ひまして」

「自分はなばりのたからものにふさわしい人間ではないんですと」

「こんな人間でもなばりのたからものになれるんですからみなさんも希望を捨ててはいけませんよと」

「誰も捨ててない思ひますけど」

「五月八日にははなびし庵で歴史影絵劇の新作も披露されました」

「新聞の伊賀版にも出てましたね」

「なばりのたからもの第十号はきょうも行く」

「なんや鉄人28号みたいですなそれ」

などに地域住民に身近なテーマで漫才を執筆し、地域社会に明るい笑いを提供している。

2009年、吉本興業が主催する沖縄国際映画祭の出品作「鬼」の脚本を執筆、赤岩尾神社（滝之原）での撮影をプロデュースした。出演は山田スミ子（故人）、たむらけんじ。収録にあたっては滝之原地区と名張能楽振興会の全面的な協力を得た。

■編集者として――

1995年から2008年まで名張市立図書館乱歩資料担当嘱託を務め、同館の収集資料にもとづいて江戸川乱歩リファレンスブック1『乱歩文獻データブック』、2『江戸川乱歩執筆年譜』、3『江戸川乱歩著書目録』を編集した。

2004年、三重県と旧伊賀地域七市町村が芭蕉生誕三百六十年にちなんで実施した「生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき」事業の一環として『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』（乱歩蔵び

「そうかと思うと五月八日におとなり伊賀市におきましては」

「何がありました」

「今年二月に結成された伊賀文学振興会の記者会見です」

「そんな会あるんですか」

「翌九日付毎日新聞のウェブニュースが下段の⑥となっております」

「なるほど岸宏子さんがらみの話ですか」

「岸宏子さんは平成二十六年に九十二歳でお亡くなりになりました」

「NHKのテレビドラマとかお書きになつてた人ですね」

「略歴は下段⑦の五月十八日付朝日新聞ウェブニュースでどうぞ」

「その岸さんの遺産がまるつと伊賀市に託されました」

「岸さんがお住まいやった家の土地建物と遺産がざつと一億円」

「一億円ゆうたらしいしたもんで」

「伊賀の文学振興に役立ててほしいという岸さんの遺志を受けて岸宏子文学振興基金が設立されました」

「それが四年以上もほつたらかしやつたわけですか」

「伊賀市も名張市もお役人ゆうのは手に負えんとなつたら平気でずるずるほつたらかしにするんですね」

「それで市民サイドから活用策を提言したいゆう声が出たと」

「伊賀市も名張市もお役人のみなさんはいええだけずんべらぼんですから」

「よそのお役人までずんべらぼん扱いすることないやないですか」

「さすがに伊賀市もこれではまずいとうつすら気がついたんでしようね」

「何か動きがありましたか」

「五月十二日付中日新聞のウェブニュースを下段の⑧でお読みください」

「基金四十二万円で岸宏子文庫を開設したんですね」

らぎ委員会発行)を監修、探偵小説史研究の貴重な資料として世に送った。

2014年、江戸川乱歩の生誕百二十年を機に個人誌『伊賀一筆』創刊兼終刊号を発行、乱歩が学生時代にまとめた肉筆の手製本『奇譚』を活字化して掲載した。『奇譚』は2016年、藍峯舎(東京)から出版された。

2017年、小学館(東京)が配信した電子書籍『江戸川乱歩電子全集』の随筆・評論の巻(全二十巻中五巻)の監修を担当し、第十六巻『随筆・評論 第一集』にcafe mink(上八町)で採録されたインタビュー「カリスマ囑託の驕慢と頹落」が収録された。

⑤

あなたは名張で誕生した江戸川乱歩が執筆した多くの探偵小説などを研究しその著書を整理されると共に郷土名張の歴史を材にした物語を創作し市内外に乱歩と名張の魅力を長年に亘り発信する努力をされ乱歩文学の振興に尽力されました

よつてその功績に対し「なばりのた

「お茶を濁してるだけの話なんです」
「たしかにうわつつらを取り繕つてるだけの感じですね」

「伊賀市のお役人も名張市のお役人もお茶を濁させたら目を見張るほど抜群の働きを示してくれますから」

「そこまでゆうことありませんがな」

「ほんまに手前どもは何も考えさせていただかないことにさせていただいておりますと顔に書いてありますからね」

「もうええゆうのに」

「とにかく最初に考えておかなければならないことを何ひとつ考えようとせずうわつつらだけお茶を濁していつべん叱り飛ばしたるか思ってるうちに異動でどっか行ってしまいますから」

「そしたら民間の伊賀文学振興会は提言とか顕彰とか研究とか広報とかちゃんとできるんですか」

「まず無理です」

「それではあきませんがな」

「なにしろ伊賀市にしても名張市にしても知性にはまるで無縁な土地柄ですから」

「またそれですか」

「それにそもそも文学ゆうのがどうゆうものなのかよくわかりませんし」

「たしかに漠然としてますわね」

「いったい何がどうなつたら文学振興が果たされたことになるのか」

「そのあたりも非常に曖昧です」

「だいたい文学そのものの相場がもうだだ下がりですから」

「そうなんですか」

「そこの大学でもいまや文学の肩身はものすごく狭いですからね」

「なんでですわね」

「世の中が貧しくなつてなんらかの実に結びつかない研究はだんだん白眼視される傾向にあるみたいですよ」

「医学とか科学技術とかの研究は世の中に貢献しますけど」

「からもの」と認定し永く顕彰します

【⑥】

伊賀文学振興会 発足 ゆかりの作家を顕彰、研究 故・岸さん宅の活用策も提言 来月総会 / 三重

伊賀地域ゆかりの作家の顕彰や、伊賀を舞台にした作品の研究、広報などを目的に発足した「伊賀文学振興会」は8日、ハイトピア伊賀（伊賀市上野丸之内）で6月1日に設立記念総会を開くと発表した。市在住の作家、故岸宏子さんが市に遺贈した土地、家屋や基金の活用策が市から提示されない中、活用策を提言したり、利用法が決まった場合の事業委託先になつたりすることも視野に入れている。

【⑦】

三重 伊賀文学振興会が発足 岸氏の遺産有効活用に向け

岸さんは旧上野町生まれで、作家横光利一は父のいとこにあたる。1942年に懸賞小説に「醜女」が入賞し作家デビュー。伊賀に住み続けながらNHK銀河テレビ小説「巣箱」や、小説

「文学はそうではないですから」

「そしたら文学てなんの役に立ちますねん」

「たとえば文学に親しむと心が豊かになりますとかそうゆうほんやりしたところとかいえないわけです」

「心が豊かになるとかいわれてももうひとつピンと来ませんけど」

「とにかく意味不明なわけなんです」

「その意味不明なものを振興したりできるとはなんですか」

「そんなただのたわごとですけどひとつだけ耳寄りな情報があります」

「といいますと」

「ふたたび五月十二日付中日新聞ウェブニュースを下段の⑧でどうぞ」

「とくに変わったことは書いてないようですよ」

「伊賀ゆかりの作家として乱歩の名前もあげてもらえます」

「たしかにそうですね」

「つまり伊賀文学振興会の守備範囲には乱歩も入ってるわけなんです」

「それがどないしました」

「一億円ですよ一億円」

「岸宏子文学振興基金の話ですか」

「一円置くのとちごて一億円ですよ」

「そんな人のギャグばくつたらあきませんかな」

「乱歩関連資料を収集しておりますと公言しながら一円の予算もつけていない名張りに比べたら」

「伊賀市には一億円が転がっていると」

「一円置くのとちがいますよ」

「それはもういいですから」

「指をくわえて見ている法はありません」

「どないしますねん」

「伊賀文学振興会が乱歩も素材にして活動をつづけたいというのであれば」

「伊賀ゆかりの作家の研究とか継続的な事業をやるゆうてくれますけど」

「若き日の芭蕉」などを手がけた。岸さんの遺言を受け、市は寄付金約1億1633万円で「岸宏子文学振興基金」を設立。旧宅の土地建物や蔵書の寄付も受けている。

【⑧】

地域の文豪の魅力伝える「伊賀文学振興会」設立

◆阿山図書室に寄贈文庫開設

伊賀市は阿山図書室（川合）に岸さんの著書や愛読書四百七十四冊を並べた「岸宏子文庫」を開設した。岸さんから寄贈された遺産で立ち上げた基金を初めて活用した。

文庫は寄贈された約千二百冊のうちの一部で、四月から図書室の一角に並ぶ。著書は「若き日の芭蕉」「荒木又右衛門」「嘘と明日があればこそ」「九鬼水軍物語」「忍び歌」「本居家の女たち」など二十冊余。そのほかの大半が愛読書や蔵書で、郷土の歴史に関する本も多数含まれる。

本に貸し出し用のバーコードを取り付け四十二万円を基金から取り崩した。

「その一環として名張市立図書館の乱歩関連資料収集の肩代わりをしてもらえないものかと」

「名張市立図書館が伊賀市やのうて伊賀文学振興会と連携するわけですか」

「ただしいろいろな問題もありまして」

「といいますと」

「伊賀文学振興会は海のものとも山のものともつかない任意団体なんです」

「まだ発足したばかりですから」

「極端にゆうたらいつ解散してもおかしくない団体です」

「それはそうかもしれません」

「そんな団体が公共図書館の役割を肩代わりできるのかどうか」

「将来にわたって永続的な資料収集ができるのかどうかゆうことですか」

「その点はかなり怪しいと見るべきでしょうね」

「君も一億円に目がくらんで余計なことをせんぼうがええのとちがいますか」

「ところで名張市の話ですけど」

「話題がころころ変わりますな」

「四月一日に送信した二二二頁下段③」

の市長への手紙の件です」

「お答えをいただきましたか」

「条例制定のプロセスをお聞きしたんですけど民間人館長制度の導入は予定

しておりませんゆう回答でした」

「また先回りしたお答えですか」

「ですからもう一度同じことをお聞き

したんですけど」

「お答えはどんなでした」

「五月七日に届いた回答にもやっぱり

下段⑩が書かれておりまして」

「導入は予定しておりません」と

「なんなんですかねこれは」

「君もう名張市役所の人からまともに

相手してもらてないんですね」

「ここにおわずなばりのたからもの第

十号をどなたと心得る」

「君は水戸のご老公なんですか」

図書室の担当者は「ぜひこの機会にゆかりの作家の作品に触れてほしい」と呼び掛けている。

【⑨】

伊賀地域ゆかりの作家は、推理小説家江戸川乱歩や「名張少女」の田山花袋、「忍ぶ糸」の北泉優子さん、芥川賞作家伊藤たかみさん、ミステリー小説家麻耶雄嵩（まやゆたか）さんらが活躍。司馬遼太郎の「梟（ふくろう）の城」といった伊賀忍者を題材にした作品も多い。福田さんは「伊賀の文学作品を通して地元を再発見できたら。若い人にもぜひ仲間に加わってもらい、継続的な事業にしていきたい」と期待した。

【⑩】

ご提案いただきました民間人館長制度は、平成31年4月1日付けで頂戴しました市長への手紙でもご回答いたしました。が、本市では現段階において民間人館長制度の導入は予定しておりません。